



ippo(いっぽ)

【研究主題】 キャリア教育の視点で小・中・高を貫く教育課程の編成
～学部間をつなぐ仕組みを活かした取組～

12月2日の公開研究協議会では、学校関係者、施設事業所関係者、教育センター職員等、校外から約70名の方々に参加していただき、たくさんの御意見をいただきました。ワーキンググループ単位で実施した各分科会での話題について紹介します。本号は①グループです。

ワーキンググループ①（小学部1～6年と中学部1年） 分科会より
協議題『指導が積み重なる小・中連携について』

★ワーキンググループの取組について★

- ・互いの学部で思っていること（こんな力が必要だ、育ててほしい）を話せる場は、小・中両方にメリットがある。ワーキンググループという仕組みで共通理解することで、実際の指導に生かせると感じた。
- ・学部の中で授業が完結しやすいが、ワーキンググループによって、枠を越えた授業の拡がりが期待できる。
- ・小→中、中→高へ進学するときに、たくさんの引き継ぎ資料を作成しているものの、資料だけでは具体性が伝わりにくく、指導が継続していかない課題がある。ワーキンググループの成果が子どもにどう返るのか興味深い。
- ・中1の職員は、小学部の職員に中学部のことを伝え、小学部との橋渡し役を担う大事なポジションである。

★キャリア教育全体計画の活用について★

- ・小学部が低学年と高学年に分かれているのが良い。段階を踏んだ支援ができる。
- ・各学部で「キャリア教育の重点」を3つの観点から挙げ、それを学団→学年→個人へとおろしたねらいを話し合っている。（横手支援学校）
- ・シンプルに、卒業後の生活がより良く過ごせることを目指し、一人一人のケース検討会でキャリア教育の視点からどこをねらっていくか検討している。（ゆり支援学校道川分教室）

＜指導助言＞ 秋田県特別支援教育課 高田屋 陽子 指導主事より

- ・本時のめあてである「成功」がどういう状況なのかを、やり取りを通して学んだことで、このめあてが子どもたちにストーンと落ちて、任務の遂行ではない、意欲をもって役割を果たす姿につながった。
- ・教師と子どものやり取りに我慢強さがあった。子どもの思考をイメージして、子どもの内で何が起きているかが分かっているからこそできた「待つ姿勢」。
- ・任務の遂行、役割を果たすだけでは子どもたちの心は動かない。自分がやっても楽しい、面白いからこそ意欲的に取り組めた。自分が十分楽しんで、楽しい気持ちがあるとそれを外に出したい、相手に伝えたいという内側から意欲が出てくるのではないか。
- ・キャリア教育全体計画＜目指す姿＞を見ると、部分部分で低学年→高学年→中学部がつながっている。そうした方向性を確認し、子どもの育ちとしておさえることが大事である。
- ・ワーキンググループの話し合いが、学部内の授業につながりを生んでいる。毎回積み重ねてきたことで、成果が表れてきた。今回の成果を、次年度の教育課程につなげてほしい。

★ 次号は、②グループを紹介します。